

状況 (Situation) における身体
慶應義塾大学等非常勤講師
宮下寛司

本発表では、近年ドイツ語圏の美学・芸術学研究において注目されている「状況 (独: Situation)」というテーマを用いて、現代舞踊の実践における身体の特徴を再検討する。

現代芸術に関する議論のうち、観客や鑑賞者が果たす役割を重要視することは諸ジャンルを超えて共通の論点となっているようである。いくつかの芸術実践は観客や鑑賞者を安定したポジションで作品を眺めるといった受容者から、芸術実践のプロセスに参加する生産者の立ち位置へと動かそうとする。そればかりかこうした関与そのものが実践の目的でもありうる。舞踊を含めた舞台芸術にもこの傾向はみられるのだが、観客席に黙して座る観客を解放し能動性を与えることが目指されてきた。舞踊に関して言えば、芸術的対象としての身体運動を産み出す舞踊家とそれを観る観客という対照がはっきりしない現代舞踊の実践が多くみられてくるようになった。こうした実践における身体とは、どのような機能や役割を担い、美的特徴を有しているといえるのか。

以上の現代の芸術動向を分析するためにドイツ語圏の美学・芸術学においては「状況」という語が用いられている (Meiyer 2021)。この語自体はすでに哲学や社会学の領域において用いられてきた。「状況」の問題とは、人間を取り巻く環境を起点として、知や行為の生成を考察することである。鑑賞者の能動性へと働きかける芸術実践は、この状況を方法論としてしていることが多い。実践の成果や作品のあり方は状況にとってとらわれた鑑賞者の知覚行為に依存するのであり、そうした知覚とは常に個人を取り巻く制度や機関との権力的な関係によって生み出される。社会領域などの一般的な状況と異なり芸術の状況において固有なのは、鑑賞者の行為や知覚を通じて、状況が変容しうることである。制作者の意図を達成させるプロセスを鑑賞者はたどるとしても、鑑賞者が自由な鑑賞行為を保持し続ける限りにおいて、状況は想定されなかった結果へと導かれる。それは、美的な状況が常に鑑賞行為を遊戯として鑑賞者に委ねているからである。芸術の状況とは、他の要素との関係と遊戯的鑑賞の自由という両極の間で、参加者の主体性を創出することを目指しているといえる。

演劇や舞踊といった舞台芸術はこうした状況を作り出してきたといえるため、状況概念そのものは舞台芸術の現代的な試みだけを示す語で

はない。西洋の 20 世紀以降における舞台芸術の実践と理論は、開放的な状況を創出することを模索し続けてきており、パフォーマンス芸術／理論はこうした運動の流れにある新しい展開である。近年の研究が示すとおり、パフォーマンス性に関する議論は旧来言われてきたように反演劇性の議論であるよりはむしろ、それ自身に演劇の要素を含んでいる (Aehig 2021)。それゆえ舞台芸術とパフォーマンスは対立するばかりか演劇性を共有していることを確認することができるが、それは新たな芸術実践が畢竟演劇というジャンルへ収斂することを意味するのではない。それらの実践における基礎とは何かを確認できるのである。

舞踊・演劇学者ゲラルト・ジークムントは、近年の舞台芸術やパフォーマンスにとって創出される状況をまとめる際に演劇性を基礎としており (Siegmond 2020)、本発表では彼の理論中心に状況概念を確認する。ジークムントは舞台芸術やパフォーマンスという芸術は「人々が集うこと」であるとし、近年では参加型をより志向したとしても、観客という役割は消え去るわけではないとしている。こうした観客の役割とは美的状況における鑑賞者の役割と同じであるといえるが、とりわけ演劇性にとって観客は構成的要素である。舞台芸術における観客の視線が重要であるのは、見る／見られることによる直接的な相互承認が生じるからではない。一方で表現者の意図と異なる解釈や経験を産み出すのであり、他方では観ている行為や表現を必ずしも観ている通りに理解できるとは限らないという相互のずれをもたらすからである。ジークムントは演劇性をこうしたずれに生じる第三の審級として定めている。舞台芸術やパフォーマンスによって創出される状況の特質とは、このような演劇性の直接的なコミュニケーションの不可能性であり、それゆえの可能性である。

以上のような状況理論を確認したうえで、日欧のパフォーマンスを例にとり、状況における身体を考察する。状況における舞踊家は、舞踊的運動や演劇的行為といった特別な何かを呈示してくれることを観客に期待されている。この期待された特別な行為は、身体を通じて実現されようとするのであるが、舞踊家が持つ意図もまたずらされながら、常にその期待は達成されることなくずらされ先送りにされていく。上述の演劇性をもたらすズレが期待の直接的な実現をもたらさないためである。それにより身体は舞踊家にも所有されきらない部分を持つ。本発表では以上の点を抑え、状況における舞踊の身体は欲望や期待の力学の場として動き続けることを確認する。